

池田 潔 著

自由と規律

—イギリスの学校生活—



岩波新書



池田 潔 著

自由と規律

—イギリスの学校生活—

G531.3/R2

岩波新書

贈書

17

池田 潔

1903年東京に生まれる
リース・スクール卒業，ケムブリッジ
大学卒業，ハイデルベルグ大学に在学
した
専攻—英文学，英語学
現在—慶応義塾大学文学部教授
著書—「よき時代のよき大学」「歩道の
ない道」「第三の随筆」「砂にか
かれた文字」

自由と規律

岩波新書(青版) 17

1949年11月5日 第1刷発行
1963年6月20日 第25刷改版発行 ©
1965年9月15日 第30刷発行

¥ 150.

著 者 いけ だ きよし
池 田 潔

東京都千代田区神田一ツ橋2—3
発行者 岩 波 雄 二 郎

東京都新宿区改代町24
印刷者 田 中 昭 三

発行所 東京都千代田区 株式会社 岩 波 書 店
神田一ツ橋2—3

落丁本・乱丁本はお取替いたします

理想社印刷・田中製本

序

本書の校正刷一六六頁（初版）を私は手から離さず読み了へた。多くの読者は同じ経験をするであらう。

それはイギリスの青年の受ける教育を自身直接の体験にもとづいて語つたものとして、先づ我が教育界の人々によつて珍重されるであらうと共に、イギリス人の国民性を論じた論文としても、楽しい学校生活を描いた文学としても、広く、また久しく読まれるに違ひないと思ふ。これを読んで今更の如く、ここに一の偉大な国民がある、と感ぜざるを得ない。さうしてまた、その国民が、殊にその指導者たるものが、受けて来た教育の如何なるものであるかを知つて、「故あるかな」と感ぜざるを得ない。多くの読者はこの言に首肯されると思ふ。

例へば、学校の試験に絶えて不正行為の行はれないといふのは、そこでは儼たる事実である。個人の自由は最高度に尊重せられつゝ、而かも規律といふものに対して人が黙々として服従す

ることも事実である。学校教師の權威は問ふことを許さぬものとせられつゝ而かも生徒は是非の意見を憚るところなく言ひ、教師も亦たよく之を容れるのが当然の事とされて居ることも事實である。斯る氣風と不文の常律は抑もいかにして養はれ得たのであらうか。

我が六三制といふものは、兎も角も形は整ひかけてゐる。これを採用するに方つて、政府当局者に、延いては国民一般に、甚しく用意と思慮とが欠けたことは、今更言つても致し方ないが、殊にこの制度に盛るべき教育内容については、そこになほ幾多の問題がのこされて居り、今後他国の経験に学ばなければならぬことが無数にある。外国の大学についても吾々は甚だ知らないが、殊に大学以下の学校教育の実情について一層の無知を自ら感ずる。特に知らねばならぬことは、世界の健強なる国民が、大学以前の青少年に、人間の尊貴とその義務の重きことをいかに教へ、彼等の道義心の涵養と道德的勇氣の鍛鍊とをいかに行ひつゝあるかといふことである。附け焼刃でない民主主義の確立は、こゝから出発しなければならぬ。さうして池田教授の此の本は、イギリスに関する限り、充分に此の問に答へて居る。

著者はパブリック・スクール（リース）と大学（ケムブリッジ）と前後合せて八年の教育をイギリスで受け、更にドイツ（ハイデルベルク）に学ぶこと三年にして帰朝し、今慶応義塾大学文学

部の教授たる人である。人の師としての著者平生の心事に就いては、本書の一節に偶々それを窺はしめるものがある。著者はオクスフォード、ケムブリッジ両大学の卒業生が、我が小学校程度に相当するプレップ・スクールの教師となること、其の人々に他への就職や昇進を争ふやうな不見識の見られぬことを述べたところで、続けていふ。それは

「出世のための便宜の一時的な腰かけとするには、彼等の使命があまりに厳肅な意義をもつことを自覚しているからである。もとより物質的に報いられるところは薄い。しかし彼等には他に待つものがある。幼い魂に生命を吹き込み、そこに眠る善なるもの尊いものを目覚めさせる歓びである。しかしこれはひとりプレップ・スクールの教師とは限らない。パブリック・スクールの教師、否、イギリスのみならず、広くこの世の地の果まで、学校教師という学校教師の個々の胸に強く相通ずる一個の信念であろう」(三六頁)。

こゝに著者池田潔氏の面目を見る。

しかし、本書は右の引用節によつて或は想像されるやうな堅苦しいものではない。本書がいかに楽しい読み物であるかといふことは、左の引用によつても察せられよう。

著者の学んだリース・スクールでは一学期に二度の全休日が与へられる。その日、二三週も

前から用意した少年等は食物を携へ、或は自転車、或はパント・カヌウと呼ばれる小舟で、思ひ思ひの目的地向ふ。

「一時間も漕ぐと、楊柳の根に舟をつないで岸に上る。緑の草に一面に金ぼうげが咲いている。林檎や杏の花盛り、雲雀囀り、郭公鳥鳴き、牛が臥て、羊が草を食んでいる。そのようなチョコレート箱の絵のような所を適当に選んで、枯枝を集め火を作る。生鯿を一尾ずつ丁寧に新聞紙で包んで川の水に浸しこれをジリジリと焼いているもの、一ダースの卵を器用に割ってツェッペリン型のオムレツを作っているもの、不器用を自覚してただもっぱら蓄音機を廻らす役についているもの、二、三枚皿を拭くとそれを前に並べて、あとは深刻な表情でじっと虚空を睨んでいるもの、これが一番、芸なしの癖に食意地が張っているらしい。かくて食らい語り、語り食らい、食らい且つ食らって、これが四時の門限までつづく。」(八六頁)。

この景情とユモアとは著者独得のものである。しかし、他人の著書に寄せる序文に、その書自体の本文から長々と引用を重ねる愚はこれ以上は許されまい。

はじめ本書の出版を岩波書店に薦め、次いで強いて著者に執筆を勧めたのは私であるが、それはこれによつて我国の識者の注意を、イギリスの教育の上にも惹き得ればと考へての事であ

つた。今、印刷せられた本書が単に一篇の教育論たるより遙かに多くのものであることを見るのは、此の上もない悦びである。

昭和二十四年八月中旬

東京都三田

小泉 信三

まえがき

中学を終らずにイギリスにゆき、リース・スクールに三年、ケムブリッジ大学に五年、それからドイツに渡ってハイデルベルグ大学に三年を送った。前大戦の後始末の終らないうちから満洲事変の直前までの時期に当る。

帰って教壇に立つことなどは夢にも思わず、多くの学生の常として学校の組織や制度については殆んど何の興味ももたなかった。ただその日その日の学生生活を楽しんだというに過ぎない。

多少参考になったかも知れない二三の書物も、他の蔵書とともに火災で皆灰にしてしまった。正直に言ってこのような文を綴る資格は全くないのである。

分に過ぎて師運に恵まれているといおうか、学生時代にはリースの校長外二三、社会に出るからは小泉信三先生のなみなみならぬ御温情に浴している。終始公私にわたって十数年、担い

きれない御厚誼をいただいているのである。

この度も先生からそのお話があり、心臆し筆洩るたびに御鞭撻と御指導をいただいて、ようやく出来上がったのがこの雑文である。観察の粗雑、記憶の不備、顧みて衷心忸怩たらざるを得ない。

仰々しい献題の辞は書かない。今更、改まって小泉先生にどんな感謝の言葉が書けよう。ひそかにこの小文をお手許に差し上げて御叱正を待つのみ。

昭和二十四年六月

大磯にて
池田 潔

目次

パブリック・スクールの本質と起源	1
その制度	19
その生活	46
(一) 寮	48
(二) 校長	108
(三) ハウスマスターと教員	118
(四) 学課	129
(五) 運動競技	142
スポーツマンシップということ	158

パブリック・スクールの本質と起源

イギリス国民性の最もいちじるしい特徴は、彼等が常に好んでそれを語ることである、という言葉がある。

諧謔であるが、これは、ひとりイギリス人と限らず、古来、世界のあらゆるひとびとによりあらゆる見地から、論じ尽されてきた題目であろう。そして、多くのひとびとの一致して指摘する特性の一として、彼等に伝統尊重の気風の強いことが挙げられるのが常である。

一応、領ける判断であるが、更にその反面、伝統の維持が弊害をとまなうことを自覚した場合、彼等が決然としてその執着を断ち切るだけの良識と勇氣とをもち合わせている事実を見逃してはならないと思うのである。

周知の如く、世界最古の伝統を誇る彼等の鉄道は、現労働党内閣の基本政策の一として、一九四八年度をもって私営より国営に移された。その切り替えの行われた一昨年大晦日の夜、折

からの冷雨を衝いて、三千に近い群集がロンドンのある停車場の附近に詰めかけた。午前零時何分か前に、炭水車の横腹にG・W・R（大西鉄道）のマークをつけた、私営として最後の列車が動き出す。肅然としてこれを見送った群集は、互に手を取り合って『螢の光』を歌い、あるものは目に涙さえ浮べて、自由企業への名残を惜んだというのである。

痴愚ともいうべき感傷かもしれない。骨の髄まで染み込んだ、伝統への妄執ともいえよう。しかし、一夜明け雨霽れた元日の朝、B・R（英国鉄道）のマークも新しい初の国営列車を、歓声挙げて送り出したのも同じく彼等だったのである。ここに彼等の進歩があり、断じて退嬰（たいえい）に墮さないこの国民の土台骨の逞しさが見られる。

彼等のもつこの勇気を正しく評価するには、まず何が故にその勇気を必要としたかを究めなければならぬ。暗夜、駅頭に集い歌う群集の、自由企業に対する愛惜の如何なるものかを知らずして、これを克服し得た彼等の良識と勇断とを正しく測り知ることは出来ない。

イギリスの人文史は、端的にいつて、個人の自由獲得の歴史である。同じくその産業史は、遠く第十八世紀の不干渉主義に遡って、自由企業確立を目的とした不断の闘争を記録したものである。

イングランド銀行の国有移管も、単なる社会主義政策実施の一手段としてよりも、『スレッドニードル街の老貴婦人』として、過去二世紀半にわたり歴代政府のあらゆる干渉と闘いながら世界の金融界に君臨してきた、長い伝統の終焉という点に、一層重大な意義が見られるであろう。さらに、炭鉱業、製鉄業の国有化の問題も、その実際は言葉より受ける印象ほどに冷徹なものではないにせよ、イギリス産業に占める石炭と鉄の地位の重要さを認識しないかぎり、これを正しく理解することは困難である。しかも、主として石炭と鉄より生ずる富の蓄積が、この国の支配階級が過去にもった絶大な特権の、主要な原動力であった事実を忘れてはならない。貴族といい、富豪というが、その支配力の源泉は、一般庶民が遠く眺めて相共に伝統として尊重してきた、美々しいビロードの礼服や広大な山荘にあったのではなく、地下に埋れていた石炭と鉄にあったのである。

この過去との深い関聯を思うとき、これを断ち切った彼等の勇断が正しく認識されるであろう。あの古色蒼然たるウェストミンスターの議院からこれ等進歩的な政策が続々として生れ出ている事実、そのまま、イギリス人のもつ伝統への愛着と、必要とあれば潔くこれを改める勇氣とを象徴するものと見てよい。そして一見、矛盾とも思われるこの二つの面が、いちじる

しい摩擦もなく、その国民性の一端を形づくって着々現実に処してゆくことを可能ならしめて
いるのは、実に彼等の透徹した良識に外ならない。ここで、良識とは、この世に何が大切であ
り、何が然らざるかを識別する力を指すのである。そして注意すべきことは、良識によって到
達し得た判断を、彼等イギリス人は敢然として実行に移す勇氣を持ち備えているという一事で
ある。

イギリスの社会に、このような表面相反する性質をもつと思われる事柄が多いのは、彼等が、
個々の条件を無視した一律の制約を厭う風の強いことによるのであろう。ある場合にある事が
当然とされても、他の場合には、それと相反することが何等の矛盾もなく当然とされることが
あり得る。一定の原則に反しない限り、時の事情に応じておのずから適当な処置がとられて差
し支えなしとされている。彼等の社会が妥協により運営されると評せられる所以であるが、同
時にこれはイギリスの国民性の一面を理解する重要な鍵であらう。

さて、わが国のみとは限らないが、普通、イギリスの教育が話題に上ると、オックスフォー
ド、ケムブリッジを論ずる人は多いが、パブリック・スクールを語る人はきわめて稀である。
しかもこの両大学についても、知識教育は従属的で、人格の涵養、礼儀作法の修得に教育重点

が偏するものとされ、いわゆる『紳士道の修業』という言葉に要約されるのが常識である。この両大学に関するかぎり、あるいは幾分の理があるかも知れないが、これも決して万全の評とはいえない。何故ならば、この両大学の教育は、パブリック・スクール教育を基礎としてその上に立つことを前提としており、この絶対条件を離れてオックスフォード、ケムブリッジのみを論ずることは、無意義に等しいからである。

雲上に抜きん出た白皚^{がいがい}々の山頂も美しいが、それは決して名山の全貌を示すものではない。しかも両大学とパブリック・スクールの、おのおの、教育の形態、様式が全く相異り、ある点においては対蹠的ともいい得る場合、その一のみをもってイギリス教育の全般を推すことは、甚しく当を失するものと考えられるのである。

元来、イギリスの学生生活が『紳士道の修業』という俗評を受けるようになった原因には、精神教育に重点が置かれている事実の外に、おそらく、すべての学生が紳士として待遇され、したがって各自がその自覚のもとに行動を律するということ、更にオックスフォード、ケムブリッジ両大学の日常生活がきわめて快適なものであり、ドイツ、フランス等の大陸諸国はもとより、ある点ではアメリカの標準より見ても贅沢と評し得るものであること、などが算えられ

るであろう。その意味において、また、飽くまでもこの両大学に関するかぎり、この『紳士道の修業』という批判はある程度容れてよいかも知れない。

しかし、これのみをもって、イギリス人の抱く教育の本質に対する観念を忖度^{そんたく}することは当を得ないのである。万事一律を忌む彼等は、大学教育に臨む場合と、その基盤ともいうべきパブリック・スクールに対する場合との間に、きわめて明確な一線を画している。いわば、大学における『紳士道の修業』が彼等の教育観念の一面であるとまさに等しく、パブリック・スクール学生に課せられる苛烈な『スパルタ式教育』も他の一面であるに外ならない。そして、この盾の両面を正しく見ることに、イギリス教育の実態を把握する上に、不可欠な前提条件であることはいうをまたないのである。

オックスフォードやケムブリッジの、自由な、飽くまで豊かな生活に比べて、パブリック・スクールのそれは、きわめて制限された、物質的に苛薄な生活である。そしてそれは、パブリック・スクール教育の主眼が、精神と肉体の鍛錬におかれているからに外ならない。これは、よい鉄が鍛えられるためには必ず一度はくぐらねばならない火熱であり、この苦難に堪えられない素材は、到底、その先に待つさらに厳酷な人生の試練に堪えられるものとは考えられないか